



「かなちよろ」

高橋桐矢

長い雨があがって、久しぶりによく晴れた春の日のことです。

かなちよろが一匹、草地のはじつこの平たい石の上でひなたぼっこしていました。

かなちよろは小さなトカゲです。トカゲは、寒くなると体が冷えてしまうので、こんなよいお天気の日には、かならず体をあたたために出てくるのでした。

おひさまにてらされて、ちょうどいいぐあいじんわりあたたかくなった石に、おなかをぺったりおしつけ、かなちよろはぬくぬくと目を閉じていました。

それを、じっとねらっているものがいました。草地のケヤキの木にとまったカラスです。

カラスは、ねらいをさだめると、一直線にまいりました。

おどろいたのはかなちよろです。突然の黒い影に、あわててしつぽを切って逃げました。

切りはなされたしつぽは、しばらくぴちぴちと飛びはねていました。それがしつぽの役割です。しつぽが生きもののように動いて、敵の目をあざむいているうちに本体が逃げる、それがかなちよろのような小さな小さなトカゲの作戦でした。

けれど場所が悪かったのです。

しつぽは切りはなされると同時に、平たい石の上からすべりおち、草と石のあいだにはまってしまったのです。

かなちよろの本体が逃げたことをしつぽは知りません。自分の役割をはたそうと、精一杯、ぴちぴちと動いていました。

やがて、しつぽは、動くのをやめました。

そしてそつとあたりをうかがいました。カラスは行ってしまいました。かなちよろもいません。

「ぶじに、逃げたのかな？」

しつぽは思いました。

それなら、しつぽの役割はおしまいです。

でも本当のしつぽの役割は、かなちよろの本体のかわりに食べられることなのです。もうカラスはいません。

どうしよう、と思いました。

しつぽは、ただのしつぽですから、歩けません。いつも、体のあとにくっついて、ゆらゆらゆれたり、くるっと丸まったり、長くのびたりしていただけでした。

しつぽは、急に、心細くなりました。

なんだか、自分が自分でないような気持ちになりました。

今までは頭からしつぽまであつて、かなちよろだったのですから。今はただのしつぽです。かなちよろが、ただの「ちよろ」になってしまったようなものでした。

さて、どうしよう、と思いました。

草と石の間にはさまったまま、考えました。

見上げると、春のあたたかい日ざしがまぶしい、いいお天気です。

水色の空の遠くには白い雲も見えます。すぐそこに黄色いタンポポがゆれています。

しつぽはついさつきまで、いつもかなちよろの足の後ろがわばかり見ていました。前を見たくても、体がじゃまで見えませんでした。でもその体は、もうありません。

見はらしはよくなったのに、心は晴れません。

思い浮かぶのは、かなちよろの体のことばかりです。

もしかして、しつぽが草と石の間にはまっていた間にカラスに食べられてしまったのかもかもしれないと思い、それからすぐに、いややっぱりきつと逃げたのにちがいない、と思いました。

逃げていたら、今ごろ、どこか別の石の上で、またひなたぼっこしているでしょう。同じ空を見上げて、しつぽのことを思い出しているかもしれない。

かなちよろの体も、ちよろが取れて、ただの「かな」になってしまったような、心細さを感じているのでしょうか。

取れてしまったしつぽのことを思い出すこともあるのでしょうか。

あるといいような、ないほうがいいような、なんともいえない気持ちになりました。そのうちに、切りくちが、ちくんちくんと痛くなってきました。

ぴちぴちはねていたときは夢中でしたから、痛さを感じるようありませんでした。トカゲがしつぽを切っても血はでません。血も出ず、痛みもないように、ぼろりと取

れるようになっているので。

それでも、ほんとうはちよつとは痛いのです。

かなちよろの体も、しつぽの取れたところが、ちくんちくん痛むのでしょうか。

そう思ったら、たまらなくなりました。

かなちよろの体がどうしているのか、気になって気になって、じっとしていられせん。

「だれか、だれかいませんか！」

しつぽは、ひかえめに、呼んでみましたが、誰もこたえません。

タンポポの上をぶんぶん飛んでいたハチが、ちらとしつぽを見おろしました。しつぽは、ハチにたずねました。

「さつき、カラスが来たのを見ましたか？」

ハチは、花のみつを集めるのにいそがしそうです。

「かなちよろを見ませんでしたか？」

もういちどたずねてみましたが、ハチは何にも答えず、飛んでいってしまいました。しつぽは、くやしくてくねくね動こうとして、はっとしました。

さつきより動けなくなっています。

ためしにびちびち飛びはねてみましたが、のたのた動いただけでした。

そのうちに固まって動けなくなってしまうでしょう。そのまえに、こんな草と石の間にはさまっていたのでは、かなちよろがここにもどつてきても気づかないで通り過ぎてしまうかもしれません。

しっぽは、ひっしに動きました。生きのいい動きに見えるよう、一生懸命飛びはねました。こうしていれば誰かが気づいてくれるでしょう。

もうくたくたになるほど動いたころ、一羽の若いモズが平たい石の上にまいおりました。

しっぽは動くのをやめて、モズを見上げました。

「お願いがあるんです」

モズは、びっくりした顔でしっぽを見おろしました。しっぽは最後の力をふりしぼつてたのみました。

「かなちよろを見ませんでしたか？」

モズは、首を振りました。

「いや、見ませんでしたよ」

「そうですか」

その声があまりにがっかりとしずんでいたからでしょう。モズは、一歩近づき、そろそろと問いかけました。

「どうかしたんですか？」

「はぐれてしまったんです」としつぽは、モズにうったえました。

「カラスにねらわれて、ほらこのとおり、体とわかれたんですが、かんじんの体がぶじかどうか確かめないことには、わたしはもう死んでも死にきれないんです」

切々としたうったえに、心を動かされたのでしよう。モズは、もう一歩近づいて、

「そうですか。それはお気の毒に」

と、丸い黒い目で、しつぽをじつとながめました。

見られてしつぽは、なぜかむずむずとしましたが、がまんしていました。

ふと、モズが、にっこりとほほえみました。

「いいことを思いつきました」

「なんででしょうか」

「あなたは、かなちよろの体をさがしたいのでしょうか？ でもそんなところにはまっていたのでは、いつまでたっても見つかりっこありません。だったら、高いところからさがせばいいんです。わたしたち鳥のように、空の高いところから見おろせば、かなちよ

ろなんて、どこにかくれても丸見えです」

「それはいい」と喜んだのもつかのま、しっぽははたと気づきました。

「どうやって高いところに行けばいいんでしょうか」

「あんじることはありません。わたしが連れて行ってあげましょう」

「ああ、ありがとうございます」

しっぽは涙をながさんばかりに喜びました。

モズは、そっとしっぽをくわえると、さっと飛び立ちました。

はじめて飛ぶ空に、しっぽは気が遠くなりそうになるのを、ひっしにがまんしました。

モズは、草地のケヤキの木の枝に止まりました。

しっぽを口にくわえたまま、たずねます。

「ただ置いたのでは落ちてしまいますから、ちょっとさしておきますよ。大丈夫ですか」

「はい、どうぞ」

木の枝にさされて、ちくりと痛んで、またかなちよろの体のことを思い出しました。

モズは、少し離れた枝に止まって、しっぽをながめました。

「ほら、下を見てごらんなさい。よく見えるでしょう」

「わあ！ ほんとうだ！」



草地のぜんぶがすっかり見ええました。ひなたぼっこをした平たい石も、ここから見ればなるほど丸見えです。

いつもよくさんぽしていた土手までよく見えます。どこかにかなちよろがいるかもしれません。

夢中になってさがしているうちに、いつのまにかモズはいなくなっていました。

しっぽは毎日、草地のすみからすみまで目をこらして、かなちよろをさがしました。平たい石の上も。草のすきまも。土手のさんぽ道も。

晴れの日も。くもりの日も、雨の日も。……くもりの日や雨の日は、体が冷えてしまうので、かなちよろのようなトカゲはあまり出歩かないものなのですが。

長い雨の日が続き、それから暑い夏がやってきました。草地にも、こぼれた種から、ひまわりが咲きました。

ケヤキの木は緑の葉をどんどんいっぱいにしげらせていきました。そのうちにしっぽも、すっかり葉っぱにかこまれてしまいました。固くなってしまったしっぽはもう動けませんでしたが、それでも精一杯のびて、葉っぱのかけから草地を見ていました。

ちよろりとうごく姿に、かなちよろだと思ったたら、よく見ると、ちいさな草へびでした。トノサマガエルは、ぴよんと飛ぶので最初から違うとわかります。おんぶバッタに、

こおろぎ。ハタネズミ。

ときどき、イヌがやってきて、あちこちくんくんかいでいきます。

イモリや、ヤモリも見かけましたが、かなちよろは見かけませんでした。

やがて、秋が来て、ケヤキの葉も、はらはらと舞い落ちていきました。

空気が冷たくすきとおりに、空の青さがいつそう深くなっていきました。

すっかり葉を落としたケヤキの木の枝で、しつぽは、まだかなちよろをさがしています。

一日ごとに、寒くなっていきます。虫やへびやいろいろな生き物がいた草地も、茶色にかれて、動くものも見かけなくなっていました。

へびやカエルはもう冬眠してしまったのでしょう。

死んでカラカラになったコオロギが、北風に吹かれて、平たい石の上をころころ転がっていききました。

ある晴れた冬の日、鳥の羽ばたきがして、気づくと、モズがしつぽを見ていました。

「かなちよろは見つかりましたか？」

言われるまで、あのモズだと気づきませんでした。若いモズは、ひと夏をすぎて、すっかり大きくなましくなっていたのでした。

「いえ。それがまだなんです」

その答えを聞いたモズはがっかりと肩をおとしました。しっぽはあわてて付けくわえました。

「でも、もうすぐ見つかると思います。夏は葉っぱがしげって見えなかったんです。でも今はほら、こんなによく見えますから」

「そうですよね。きつと見つかりますよね」

モズはなぜか恥ずかしそうに笑いました。

それからは、ときどき、モズがやってきました。

「かなちよろは見つかりましたか？」

「いえ、まだですが、すぐ見つかるはずですよ」

広場には雪がつもって、一面真っ白になりました。

雪の上をイヌがあるいて、足あとが点々とつきました。それからまた雪がふり、足あとを消しました。

またモズがやってきました。

「かなちよろは見つかりましたか？」

いつのまにかモズの様子はずいぶん変わっていました。げっそりやせていました。美

しく生えそろうた羽はつやをなくし、たくましく引きしまった体は、骨と皮しかないくらいやせこけていました。

「いえ……」とこたえようとしたりしつぽは、ようやく気づきました。

かなちよろの体とわかれていらい、ずっと何か途中のままのような気がしていました。でも、かなちよろが生きていれば、いまごろ、もうとうに、新しいしつぽが生えていくはず。切り口の痛みは、しばらくすれば、新しく生えてくるむずむず感にかわりまします。きりくちに新しく生えたしつぽは、もうすっかりもとのしつぽより大きくなっているでしょう。

しつぽは自分を見ました。

からからでしわしわの干からびた、しつぽでした。

かなちよろとわかれたしつぽに、何かできることがあるのでしょうか。

しつぽは、モズに向き直りました。

「とうとうかなちよろに会えました」

モズは、「そうですか」とつぶやき、目をそらしました。

かなちよろは、「モズさん」と呼びかけました。

「ありがとうございます。今日まで待つてくれてありがとうございます」

モズは、ちらと顔を上げました。するどいくちばしがカチカチとなりました。

かなちよろは、ちよつとだけこわくなりました。

「できるだけ痛くないようにおねがいしますよ」

モズは、大きくうなずきました。

「ええ、ひと飲みで、ひと飲みですから」

モズは、からからに固くなったしっぽをくわえると、木の枝から外し、大きく口をあけて、飲みこみました。

モズにとつては二週間ぶりの食事でした。

初めて冬をむかえる若いモズは、雪がつもつてから一度もえものをつかまえることができないでいました。今日、何も食べられなかったら、うえ死にするところでした。

モズの腹のなかで、かたいしっぽがふやけてとけて、じんわりあたたかくなりました。

モズは、そういうえばずつと昔に同じ味のなにかを食べたような、と思いました。

でもそれは、とかげでも、かなちよろでもない、なにかでした。

そうです。しっぽのないかなちよろは、一見、かなちよろには見えないのでした。

春の晴れた日、カラスから逃げたかなちよろは、そのあとすぐに、若いモズにつかまって腹の中におさまったのでした。

しつぽは、同じ腹の中で、かなちよろの体に会えました。

そんなことも知らず、モズは、小さくつぶやきました。

「ああ、助かった」

そして満足そうにほほえみました。

「あせって食わずに待っていてよかった」

お礼を言ったしつぽのうれしそうな姿を思い出し、ほんとうに、待ってよかったと思つたのでした。